

今月は、戦国時代、斉の宣王(在位前319～301年)のお話です、この宣王は、昨年わんりい7月号のこの欄で取り上げた、「三年、鳴かず飛ばず」のお話の主人公・威王の子供です。(史記では、もう一人楚の荘王にも同じ逸話を載せています)。



斉の宣王が、嘗て孟子に、どうしたら立派な王様になれるかと訊ねました。孟子は、それに答えて言いました。

「すぐれた国王になりたいと思ったら、国民に落ち着いた生活を保障し、楽しく働けるようにしなければなりません。と同時に、自分の国を十分に理解して、何をすべきか、何をすべきではないかをきちんと知らなければなりません。つまり、国民みんながあなたを立派な王様だと認めてこそ、あなたは立派な国王なのです」

斉の宣王は孟子の教えを実行に移しました。国の政治には、強い意気込みを持って努力を重ね、国民の生活状況に対しては、秋毫明察(細かいところまで見逃さないように目を配り)で、数年後には、斉の国は更に強力な国家となりました。



言葉の説明：人の目配りが鋭敏で、どんな小さなことも見逃さずはっきりと見て取ることが出来ることを指している。

例文としては、警察の人達は皆、秋毫明察で、どんな「蜘蛛の糸と馬の足跡(微かな手がかり)」も見逃さず、素早く犯罪を暴き出し、犯人を逮捕する、とあります。

ここで言う「秋毫」とは、山野の獣の身体が冬毛に変わる時、初めに生えて来る極く細い毛のことで、目を凝らしてみないと分からないが、確実な変化の兆しであることを表しています。そして、その変化をはっきりと見抜き、見逃さないことを「秋毫明察」というのです。

ところで、このお話では孟子が国王に、国王としての心構えを教え、民を大事にすることが、国の繁栄を勝ち

取る近道であると説いています。皆さんは、孟子に関してどんなことをご存知ですか？ 私はお恥ずかしいことに、孟子のお母さんが、子の教育のために3回も引っ越しをした(孟母三遷)こと、孟子は儒教(この言い方にも賛否あるようですが、ここでは便宜上、こう言います)の中興の祖であること、性善説を唱えていることくらいしか知りませんでした。

聴くところによると、孟子は、政治の要諦を国民の生活安定に置き、君子たるものはそのことに全身全霊で当たらなければならないと説いたのです。

儒教は社会秩序を重んじ、主には忠、親には孝を尽くすことが良いこととされ、急激な変化を嫌うとみられています。一般に、文化大革命のときの紅衛兵ほどではないにしても、儒教思想がアジアの発展を少なからず阻害したと考える傾向がありました。

ところが、最近10年ぐらいの間に、世界的に、勿論中国や日本でも、この考え方に疑問符がつけられ、特に孟子の言行が例として引かれるようになりました。孟子は、為政者の諮問に対して、政治の基本は民の生活の安寧にあると答えています。又、大臣の職責を訊ねられた時も、詳しく答えています。大臣が諫めても国民のことを考えない君主がいた場合、才能を見込まれて外部から来た大臣には、サッサと辞めてもっとましな君主に仕えるようにと勧め、君主の親族である大臣に対しては、命を賭して君主を強く諫め、それでも改めない時は、一族で相談して君主の首を挿げ替えるようにと進言しているのだそうです。孟子の活躍した時代が戦国時代だと言っても、このような過激な発言は、かなりショッキングなものでしょう。

それでも、その思想のよって立つところが、民の立場であり、民を見据えての発言であるところに、何かほのぼのとした感慨を覚えます。二千年以上も昔に、人民のことを主体に考えるべきだと言う、文字通りの民主的な考えが中国に存在したことに驚きを感じます。

